



TITLE:

江若の國境栗柄峠

AUTHOR(S):

小牧, 實繁; 木村, 憲治

---

CITATION:

小牧, 實繁 ...[et al]. 江若の國境栗柄峠. 地球 1936, 26(3): 194-198

ISSUE DATE:

1936-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184602>

RIGHT:

下)の延長であつてこれは尙ほ東方に連續するものであらう。

## 江若の國境栗柄峠

小 牧 實 繁  
木 村 憲 治

江若國境峠の一つ栗柄峠は元來がさう利用せられた峠ではない。併しその道は湖北高島郡の今津・海津と若狹の河原市<sup>カライチ</sup>とを結ぶ縣道でもあり、局部的にも以前は開田<sup>カイデ</sup>・牧野の人達が峠を越して栗柄の部落まで炭を負ひに行き、また馬に着けて出しもしたので、この峠も若干は利用せられたのである。

ところが今ではさうではない。山葵<sup>ウサドリ</sup>や獨活の自生するといふ淋しい峠で、近來流行のハイキングにも殆んど荒されてゐない利用價値の殆ん

ど零に近い峠である。剩へ峠の若狹側の麓の部落、栗柄は元來數戸の家を有したのが今は凡て松谷<sup>マツタ</sup>の方面に出て全滅してゐるのである。又、栗柄と松谷との間の岩蔭には盆栽用の岩芝があり、この芝は此の邊でも此所だけにしかなくその上品を採るのは命懸けであると言ふのである。

私達の好奇心は愈々唆られて今年五月十日牧野から若狹に越して見ることにしたのである。國境までは花崗岩質の山に相當いい道が刻ま

第 一 圖



れてゐて冬はスキーヤーが来るらしく、吾々は手袋やナイフや革具やチーズのからなどの空しく雪融けの路面に曝されてゐるのを見るのであったが、雪の消えた今では通行人は全然認めらるべくもない。

赤坂の類れかかつた小屋のある所が國境であつた。第一圖は國境の景觀を示す。

赤坂のゲレンデには五月十日といふのに尙残雪があり谿間部や山蔭には吹きたまりや雪崩のあとが残つてゐて照り輝く五月の青空の下に氷河を想はせるやうに沈黙してゐたから今年の江若國境の積雪は相當のものである。

つたことを知る。

國境から若狹側には残雪は更に多く部分的に氷化してゐるのを認め、積雪に撓められ拉がれた雑木の姿も哀れであるのに残雪の融け去つた部分では新緑熾ゆるが如く夏と冬の交響を楽しむことを得たのであるが、ハイカーも未だ流石にこの不便な江若國境には足を踏み入れないやうである。唯鳥が囀ぶり蛇がのさばりかへるばかりであつた。

併し時には通行人もあるらしく「左山道右高島越」と記したさやかな道標が認められたのである。若狹では栗柄越を高島越と言ふのであるらしい。

明治二十六年測圖五萬分一地形圖「西津村」によると、當時栗柄には二軒の家があつたものらしい。元來は三軒ばかりあつたのが、今から四十四・五年以前に最初の一軒が川下の松谷に移りその後全部松谷に移つてしまつたといふのである。土地の不便といふことがこの部落移轉の

第一の原因であつたと言ふ。現在は栗柄まで官林道が出来てゐて三年ばかり以前に完成、さして不便といふ感を抱かせないが、以前は道は、現に上記の地形圖上にも讀取れる如く、川からは百米近くも上の斜面を通つたもので、上り下りも激しく不便な道であつたらしいのである。

栗柄三軒のうち最も早く松谷に下つた家は現在もなほ栗柄に田を作りに来るのであるが、それとても一段餘り(七十五束刈り)に過ぎない。

元來栗柄にあつた全部の田を合せても僅かなもので米はもと／＼不足であつた。この元の田には今は馬鈴薯・小豆・唐黍などを作るが、肥料としては灰(ハグ)を與へる位が關の山であると言ふ。

耕作のために宿泊するといふことも無く、唯ヒル、クヒ小屋と稱する小屋で日中休息する丈けである。苗代も松谷で作つて苗は持つてくるのである。特殊の作物にアブラミといふのがある。櫛でも桐でもなく、七月木の下(シノ)の草を取り、九月のかかりから中頃にかけて再び草を刈り、その

實の落ちるのを待ち、十一月の終りに實を拾ひ、それを搗き、洗ひ、乾して俵に入れ検査を受けて河原市方面に出すのである。油に搾つてから出す家もあり、粕は茄子などの肥料としてよい。普通五斗俵にして出すのであるが、一戸平均七—八俵も出す、價格は時により變動があるが、大體五斗俵一俵で五—一〇圓であると言ふ。

圖 二 第



栗柄の山では

炭が焼ける。五月が濟むと新庄村中の男が炭焼に上る。そして製品は河原市に出すのである。江州方面に出すことは今は全然ない。山仕事は炭焼が主で材木は尠いといふ。

第二圖は炭燒小屋から運び出した炭を一時途中に積んで置く粟柄の炭置小屋である。

粟柄の部落から最も早く松谷へ移轉し今なほ粟柄の田を作りに来るといふ家の女達は上には山ジバンを着、下にはカルサンを穿き、脚にはケハンを着け（男ならばハバキを穿くとのことであつた）ツヅラ藤をシナ皮であんだテゴを持ち、小屋にはタゴモ、タゴモ紙（油紙を着けたもの）オヒナハが置かれてゐた。

吾々の粟柄に於ける一つの發見は川柳の語原の發見であつた。粟柄のヒルクヒ小屋では川柳の葉から製した柳茶を飲んでをりそれを吾々にもすすめたのであつたが、試みに味つたところ賞味すべきであることを知つたのであり、また實際に粟柄には川柳が生えてゐるのを教へられたのであつた。

粟柄邊でも冬の雪は相當物凄（ものごどろ）いものであるらしく春、雪の消えかけに出るナゼ（雪崩のこと、ユキガシ）雪マロとも稱す）は谿流を塞ぎ、ために雪橋が

かかると言ふのである。兎に角冬は雪が多く仕事は殆んどできぬらしく、女は十一月から四月一ぱいを京都方面に働きに出る。新庄では冬京都方面に出ぬ娘はないといふ。例へば京都驛前旅館の女中の如きものとして出稼ぐのである。

淺ヶ瀬でも冬の雪はすぎまじいらしく、家々みな雪に對して周圍をかこひ、屋根の煙出しも蕪で圍うてゐる。家の周圍の雪かこひをシタミと稱するのは明かに古語の保存である。併しこのかこひは雪に對するものではなく横なぐりの雨を防ぐものであると説明してくれた淺ヶ瀬の百姓もあつた。雪には蒲製のハバキを穿きコウカケを着けツマゴを穿いた上にカンジキを着けると言ひ、カンジキはカタネジの木を藁でくくり、湯に入れて反りをつけてから製するさうである。圍爐裡は勿論ありヨコザの右はシタグザ左はオンナザで、中にはカナゴをかけ上にはアマがかかる。

運搬用具としてはタゴモも勿論あるが、重い

荷を負ふものに、ニ、ジリがある。前者を輕快と形容するならば後者は鈍重である。

淺ヶ瀬で一軒の便所を窺つて見たが二枚の板を渡したものが二組あり、紙の代りに藁が用意せられてゐた。新庄ではマ、フズの皮を剝ぐ老夫婦を見たが、これで織つた布は丈夫であり、且例へば蒸しものの時など麻布では米が引ついて駄目であるが藤布はさうでないとの話であった。また新庄では卯月八日<sup>ウツキ</sup>として門毎に花を梶

## 二つの國際學術會議

今村學郎

一、バルト海沿岸諸國國際水學會議に於ける  
氷雪研究委員會の設立動議

一九三三年のレニングラードに於ける國際會議に際して、氷雪は特異の性質を有し、その分

につけて立ててゐたのを見たのであつて、この耳川の谷には案外古式なものの保存せられてゐることを知つた次第である。民俗學者の探訪を期待する。因みに新庄の寺は禪宗である。

栗柄越は新庄方面では海津街道とも呼んでゐる。高島越といふよりは一層嚴密に、はつきりと海津への志向を示してゐると言ふべきである。(昭和十一年六月十六日)

布が廣く、氷雪圈 Cryosphere を形成する等の事實から、從來のバラ／＼の研究を國際的に統一する必要が感ぜられ、氷雪に關する文献の蒐集、書物の編纂、定期刊行物の出版、國際研究